

第3期第12回詳報

生活再建の課題実感

被災者に寄り添い支援を

311
次世代塾
伝える／備える



大学生らが東日本大震災に向き合う通年講座「311 伝える／備える」次世代塾 第3期の第12回講座は18日、仙台、名取両市の災害公営住宅や仮設住宅などを訪問し、受講生約80人が生活再建を学んだ。

仙台市若林区では津波被災した旧東六郷小跡地を視察した後、東六郷コミュニティ

イ・センターで、市社会福祉協議会の生活支援相談員秋谷智明さん(49)と、同区六丁の目西町災害公営住宅に暮らす熊谷芳一さん(72)の話を聞いた。

熊谷さんは「入居当初は顔見知りがいなくて不安だ

つた。秋谷さんが話を聞いてくれたり、助言してくれたりしたので、前向きに考えられるようになった」と支援に感謝した。

名取市では閉上中央町内会の集会所で、震災で自宅を流失した町内会長長沼俊幸さん(57)らが講師を務めた。閉上地区では行政による観光施設の整備が進む。

公営住宅に入ったたり、自力再建したりして少し落ち着き始めた被災者は、開発のスピードに気持ちがついていけない」と述べた。

長沼さんが約6年間暮らした、自治会役員を務めた同市の愛島東部仮設団地も訪

れ、仮設住宅の室内を見学。入居から4、5年後、子どもが成長して部屋が狭くなるなどの理由で空き部屋の借用を市役所に打診したが、法律の規定で借りられなかった事例を説明した。「被災者の実態に合わない法律や制度がたくさんある。皆さんには問題点をあぶり出し、次の災害に生かしてほしい」と訴えた。

「復興はがれき撤去やインフラ整備で、終わりではない。被災者一人一人の生活が再建できてこそ復興だ」という視点を社会で共有すべきだ」との発言があった。

視察後、受講生は仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスでグループ討議をした。学生らから



旧東六郷小跡地で慰霊碑を視察する受講生
＝2020年1月18日、仙台市若林区



仮設住宅の室内で長沼さん(左)の話を聞く受講生
＝2020年1月18日、名取市愛島の東部仮設住宅団地

受講生の声

担当の東北福祉大インターン生は次の通り(敬称略)。3年内村大樹▽2年鈴木真羽、武藤有沙

つながり強めたい

復興は家や道路だけでなく、被災者の生活が再建できて初めて成し遂げられると感じました。法制度の改

若者の参加が重要

若者の力が必要という話が印象に残りました。高校1年から語り部をしています。大学進学後は多忙で時

復興の目標共有を

被災者一人一人の生活と心の回復を促すことが、復興につながることを考えました。被災者と行政の間に意識

善や若者の積極的な関与も必要。ボランティアなどに関わり、地域とのつながりを強めたい。(岩沼市・宮城教育大学3年・岡崎悠太さん・20歳)

間が合わず地元行事に参加できなくなりました。若者が参加しやすい環境づくりも大切だと思います。(仙台市泉区・聖和学園短大2年・相沢朱音さん・20歳)

の溝があることも実感しました。両者が目標を同じ方向に据えて取り組むことが重要だと思います。(仙台市青葉区・東北大2年・栗原史昂さん・20歳)

メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。